

「ひきこもり」と家族

川北 稔（愛知教育大学大学院教育実践研究科講師）

川北と申します。今までの方はファーストステップ・ジョブグループの内部の方々と、実際にかかわっているメンバーですが、私は部外者でありまして、2004年11月に、大阪市内でひきこもり支援団体のシンポジウムがあり、上田さんが話されて、初めてファーストステップ・ジョブグループという存在を知りまして、こんな団体があるのか、こんな活動があるのかと驚きまして、以後、「おっかけ」になったということです。こうした特別例会は今回で4回目くらいでしょうか、皆さん参加されるのは関西の方中心で、私はなぜか愛知から追っ掛けの人が来ているよというとらえ方をされていたのではないかと思います。毎回、活動に驚かされますし、今日も改めてこういうやり方もあるということに驚いたという次第です。

私自身は東海地方、名古屋近辺で、わりと普通のひきこもり支援のNPO、家族会、当事者グループ、若者自身が集まっているところにお邪魔させていただいて、ひきこもり支援について考えています。すでにたくさんお話がありましたので、私の役割としてはファーストステップ・ジョブグループが全国的にどれくらい注目されていて、ひきこもり支援の中で、こんなにヒントになる活動なんだということを改めて強調すればいいのかなと思います。

余談ですが、特別例会に来ると、お酒の席で望月先生にからまれたりします。なぜかというとは私は30代で独身だったり、車ではなく自転車で生活しているんです。「それだとモテないよ」とかいうことでからまれるんですね。うれしいことに若者の車離れ、車に乗らないという報道がされてきまして、電動サポート自転車が流行っている。ガソリンも高いし、エコの時代だし、それが売れてきたということで「よし、若者は自転車だ」と意を強くしているところですよ。

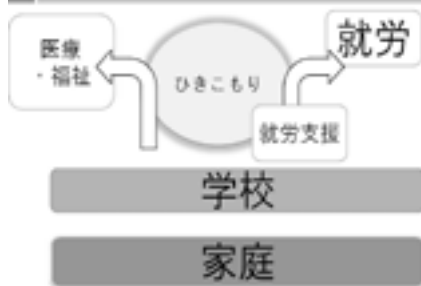
上田さんが静岡で話された時にも、「おっかけ」ですので、行ったことがあります。大阪だけではなく、静岡、愛知をはじめとする全国で注目されているファーストステップ・ジョブグループです。これまでのお話は活動の最先端の話でしたが、私の役割は、ひきこもり支援の歴史、これまでの流れをお話するということになっています。去年12月、社会学の分野でひきこもりのことを調べている者たちで『「ひきこもり」への社会的アプローチ』を出しました。ちょっと高い本ですが。この本を売ってほしいという珍しい方がおられましたらよろしくお願いします。

「ひきこもり支援」の実践と研究の推移

ひきこもり支援がいつから始まったか難しい問題ですが、考えてみますと斎藤環さんの本が出たのが10年くらい前で、今年は全国ひきこもりKHJ親の会ができて10年なんだそうです。ひきこもり問題も10年たってしまったんだと思います。ひきこもりというのはどういう問題なのか。社会学の立場から調べてみますと、従来から、家庭から学校、社会へという進路イメージがあったと思います。また不登校問題をきっかけに、必ずしも学校を経由しないと働けないわけではない、ということが提起されてきた。人生の別のコースを模索してきたということがあると思います。家族だけではなく地域も含めて、フリースクール、NPOを含めて多様な学び方があり、時には就労しながら学校に戻ってくればいい、学びたい時に戻ってくればいいんだよということで社会のルールを複線化する、たくさんにするという問題提起があったと思います。

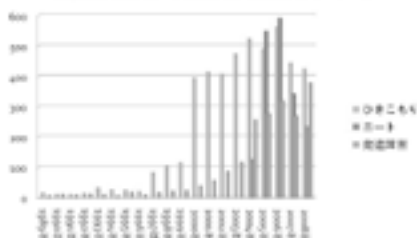
ひきこもり問題というのはそれに比べて、学校から社会へという時に、就労あるいは正社員という口は社会全体で狭まっている。一部の人しか正社員になれなかったり、就労が難しかったりということが、この10年、言われてきました。2004年、ニートという言葉が出てきて就労の部分が注目され、その就労支援の道筋は少しずつできてきたのかなと思いますし、逆に医療、福祉の選択肢、障害者としての生き方を選択するということもあると思います。

1.4 ひきこもり問題の位置



1.5 就労支援・医療と「ひきこもり」

朝日新聞の記事数「ひきこもり」と関連するキーワード



ただひきこもり問題の場合、どちらにも、すっきりと行くことができない。就労支援と言っても家からまだ出られなかったりするし、重い障害を持っているかという、必ずしもそうではない。「働くこと」と「病気」と言われるようなものの間に挟まれてきたということがあると思います（図1.4 ひきこもり問題の位置）。

私たちの本の中で、工藤宏司さんが、ひきこもりは「病気」「自立」を両極とした「どこか」に位置づけられてきたと書いています。政策的にはひきこもりということでは予算がつかないわけです。精神疾患だと障害者の作業所、ニートだったら自立塾

とかサポートステーションがあるんですが。そういうものにおさまらない何かということで、ひきこもり問題が語られてきたのではないかと思います。1990年ぐらいから新聞記事の検索をしてみると（図1.5 就労支援・医療と「ひきこもり」参照）、ひきこもりの記事が2000年頃から増えてきて、この10年くらいで問題になってきたことがわかります。片方でニートという言葉が2004年に出てきて、一時は「働けない若者＝ニート」で、ひきこもりの問題が忘れられてしまって、ニート一色になってしまうのかなと思いました。しかしそうではなくて実はここ数年、2007、8年はひきこもりの記事の件数が多くなくて、ひきこもりの方が引き続き支援が求められている課題だということがわかりました。発達障害の記事も増えてきたりしております。

こうした流れのなかでひきこもりの問題を見直すと、若者問題の焦点が働けるかどうか、就労支援の問題だけに当たってしまうことがあったりするんですけど、どうもそんなにうまくいっていない。それだけではひきこもりということで支援を求めている人の解決になっていないという気がします。就労支援に還元しないひきこもり支援ということで、我々の方だと、働くかどうかということではなく「居場所がもたらす豊かな経験」ということを本の中で石川良子さんが書いています。受容、受け入れられる、自己肯定観がまだまだ大事なんじゃないかということがあったりする。働くかどうかだけではないと。就労支援との関係では、早いうちから年齢の小さい時から発達障害という名前をつけることが盛んに進んできた。その一つには、就労ができる人なのかどうかを強調するあまり、就労訓練のために発達障害の病名が強調されてきたところがあると言われます。

「医療モデル」から脱却

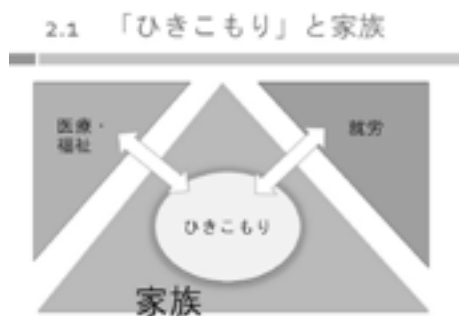
また、「医療モデル」ということが上田さんの話にもありましたが、病名、診断名をつけてそれを何とか理解していこうという方向もあります。確かに医療の手助けも必要だと思いますが、診断名だけでは支援の道筋まではできていない。本の中で荻野達史さんが書かれていますが、ひきこもり支援の居場所の特徴として、医療に直接つながらない、手帳を持っている方とか、診断名がある方であっても、治療以前にできることは続けて頑張っていくという部分があったり、病名のある人と、ない人の混在的な空間、精神障害のある人とか発達障害のある人、そうでない人、診断名がついていない普通の人、混在して、同じ施設の中で生活しているということがあられるわけです。これはひきこもり支援以前にはなかったことのようにありまして、そういうひきこもり支援団体の中で多様な人が存在することによって、病名がついていても、隔離されない支援が受けられる。統合失調症とか発達障害と言われて、そういう人だけ集めたところに入れられてしまったり、「入院させられるんじゃないか、施設に行かされるんじゃないか、普通の生活空間から遠いとこ

ろに隔離されてしまうんじゃないか」という不安があるわけですが、「そうじゃないんだ」ということが、混在した空間、いろんな病名がついた人と一緒に遊んだり、プログラムをやったり、作業したりしていいじゃないかということで、そういうことが、ひきこもり支援によって可能になってきたのではない。これは選択肢が用意されているということ、つまり病名のついた瞬間に「この人はこれができません」とか、そういう形で固定されてしまうのではなく、常にいろんな選択肢がどんな人にも与えられているということにつながるのかなと思うわけです。

これは医療モデルと、ひきこもりの支援が違うところかなと思います。ひきこもりというのは就労支援とか医療におさまりきれないのですが、だからこそ曖昧な部分も解消してしまわずに、新しい支援の模索が行われて、社会の在り方を広げてきたということ、私たちの本全体の中ではメッセージとして言いたいというところであります。

私自身は、上田さんが言われたそれまでの自助グループ的な家族会の様子を見てきました。つまり、互いに悩みを打ち明けあったり、癒しあったりするような家族会に参加して、そういう方の話を聞いてきたわけです。それに比べてファーストステップ・ジョブグループの場合は互いに仕事をつくっていく、交換していくという、今までの家族会と大分違うなと新鮮だったところがあるわけです。ひきこもりの問題は、就労に行くのか、医療に行くのが曖昧な位置づけだとさせていただきましたが、この部分に実はもうひとつ、

家族の大きな苦労があると思うんです（図2.1 「ひきこもり」と家族）。就労支援や医療に行くこと一つをとっても、ご本人が病院まで行けなかったり、相談機関に行けなかったりすることもあるので、ご家族の努力、占めている位置、負担が大きいと思います。そういうことで、



ひきこもり相談の開始は家族から始まることが多い。家から離れる支援ということで、家族と一緒にいるからひきこもっている、無理やり家から離してしまえばいいじゃないかと、強制的に家から離してしまう施設もあったりしたわけですが、かりにそうした施設を頼るにせよ経済的に親御さんのご負担が多い。あるいは自立塾とか宿泊型の施設でも寮費が1カ月15万円とか負担が大きいわけです。そこに至るまでの相談、やりとりのご家族の負担が多い。もう一つの当事者である家族が、ひきこもり問題で、ご負担も多いし、力も發揮していただいて、新しい社会をもたらせていただいている部分があると思います。

ファーストステップとは

ファーストステップ・ジョブグループの創造、クリエイトしていく、新しい仕事をつくっていく、家庭内以外で本人が「できる」仕事を援助するステップがファーストステップ・ジョブグループだとしますと、家庭内で本人が「できる」ことを援助する。仕事として報酬がもらえないにしても、家事などを援助するステップも大事なんだろうなと思っています。上田さんが言われたように「できない」と決めつけてしまう、そうとらえてしまうと、できていたこと、そういう能力も錆びついてしまう。だから家族だけではなく、支援団体とのかかわりの中で、家族のなかのことを援助していくステップもあると思います。もっと遡りますと両親のひきこもりへの見方を変える。まだまだ家族が本人さんと、どう接していいかという知識が、あまり社会の中で広まっていない、その部分で困っている、ご本人さんがコミュニケーションで困っている部分があると思うんです。こうしたステップは、これはなかなか社会の中では見えないステップで、家族が工夫されたり、努力されたりしているんだけど、それがステップとして見えてこないところがあるのではないかと思います。どうしてもひきこもり支援はご本人が家から出たとか、働いたとか、バイトに行ったとか、ステップとして見えやすいところがありますが、ご家族のステップが見えづらい。

新潟県の中垣内正和さんというお医者さんが『はじめてのひきこもり外来』を去年出されています。ひきこもりから元気になっていく時の10ステップを最初の3ステップがご家族のステップで、一つはこれまでのやり方では、どうもうまいかないと気づいた。「家族がしっかりしなきゃ」ということで、ご本人さんに叱咤激励したり、そういうやり方では、ますますご本人が萎縮してしまうことに気づいた。姿勢、考え方を変えることで一つのステップになると。そういうことは行動分析的には認めていただけるのかどうかかわりませんが、姿勢を変える、ものの見方を変えるステップがあるような気がします。結構、このステップを踏まないといけない部分があるのかなと思います。

これができたことを認めていく、ご家族だけではなく、たくさんのご家族が集まって「この会に来られたことが一つのステップですね」と、とても周りから応援を受けながら家族会を続けていく。私が実際に参加しているフィールドですが、週数回くらい集まりを開いていて、そこに参加頻度が高いほど改善したという、素朴にたくさん通っている人ほど自分のお子さんのひきこもりが改善してとされていることもデータからたしかめられます。これもただ家族会に通っているだけでも偉大なステップであり、その中で繰り返される相談活動が、改善したことにつながるということがあります。

事例から

ここで実際にひきこもりしていた方のお話を聞いて紹介しようと思ったんですが、ファーストステップ・ジョブグループのような前向きで「できた」ことが次につながっていくということではなく、ひきこもりについての見方を変えるところです。細かいところについては資料を読んでいただいて、Aさんの「全面受容」（参加初期）から「一枚岩」（3カ月後以降）への変化を見ていただきます。これは、お子さんが「子ども返り」することに関する対応です。21歳の女の子で大学生のお子さんがひきこもってしまって、一緒に寝たりとか、子ども返りしたような「どこかにつれていってほしい」と

おっしゃる状況です。お母さんが「どこかに行こう」と誘うと娘はうれしそうにする。親はつい、そうしたくなるけど、私のポジションからは一枚岩で動かないという話です。5歳になったり、3歳になったり、子どものような形で甘えてくる。声をかけてくる。その時、その年齢で受け入れるんだけど、お母さんからは「21歳の子どもの親という位置からは動かない」と言われます。こういうのがひとつのステップだなと思うんです。子どもがひきこもっていることによって、実際の年齢より子どもなんだ、あれもできない、これもできないと思うんだけど、21歳の子どもが持っている可能性は、選択肢として、親が用意しておこうということです。

このあたりがステップの考え方、選択肢を広げるという考え方で、互いに選択肢を用意しておいて、使える能力までも錆びつかせてしまわないことだろうなと思っています。

次に家族がシェルターであり、プラットホームでもあるということについて。障害者の研究をやってきた社会学者は「社会から子どもを守ってあげるシェルターの役割が親に求められている。障害者差別に同調するのではなく、子どもを受け入れてあげなさい」と言われたりします。ひきこもり支援の中で必要になっていることはこれと少し違って、人を固定的に見ない、人は常に変わっていくことを前提に選択肢を用意することだと思うんですが、それはやがてプラットホームとして、子どもが巣立っていく場として家族を考えるとだと思います。これは家族会の中で、細々したことまでアドバイスがあったりします。「カップラーメンのすすめ」という事例があります。「うちの子は炊事なんかできません」と言い切るお母さんが多いと思いますが、「カップラーメンつくらせたことはあるんですか?」と問いかける。お母さんが「カップラーメンは栄養的に偏るから食べさせません」というと、「いいじゃないですか、たとえ栄養的に問題があっても、お子さんが自分で炊事ができるという選択肢を用意していくことの方が大事なんじゃないですか?」と少しずつ子どもができる選択肢を増やしていく。お子さんのステップを援助する、選択肢を増やすことが親御さんのステップなので、そのステップをステップとして会の中で応援していく、皆でそのステップができたことを喜んで

いくことが必要なのかなと思います。「うちの子は脱いだものをその場に脱ぎっぱなしにするんです。困ったもんですよ。20歳過ぎて洗濯物を片づけることができないんですよ」「各部屋に洗濯籠があれば入れることはできますよ」。実際にやるかどうかは別として、こういうステップもあるんだということが共有されていく。家族の中で「できる」ステップが豊かになってくるのではないかと思います。ファーストステップ・ジョブグループの報酬を受ける、お金になる仕事とは違いますが、そういうステップが家族の中にあるのではないかと考えています。

FSJGの意義

最後に、ファーストステップ・ジョブグループの活動の意義について。普通のひきこもり支援、NPOでの家族会での支援を通じて拝見した時、どのへんがヒントになるかなということですが、家族と社会の境界を考え直すという部分です。ひきこもったままでの社会参加ということが、ファーストステップ・ジョブグループでは提案されています。さきほど、家庭から学校に行って社会へという階段がありましたが、「果たして仕事って、家庭から出て、学校を出ないといけないものなのですか？」と。家事労働を考えてみると洗濯することは家事ですが、クリーニング屋さんはお金をとってやっています。家事労働はやっていること自体が家事ではなく、家族のことをやるから家事になるのであって、ファーストステップ・ジョブグループのように他の家の家事を引き受けてやれば立派な仕事になる。このあたりのアイディアはすごいなと。社会的にみても正しい。家事労働は家の外に出して交換すれば立派な仕事になることですね。そういう仕事を請け負うことで社会が広がる。家族を出てから働きなさいということではなく、家族や地域自体がジョブを交換したり、仕事をつくることによって、家族や地域にとっての社会が広がる。そこに参加することによってご本人の社会が広がっていくことが大事ではないかと思います。ファーストステップ・ジョブグループがNPOからの仕事を請け負ってご本人に卸すという派遣事業のようなこともおっしゃって

いましたが、まさにそういう部分だと思います。

また、一つひとつのステップをグループも本人も確認し、喜ぶことができる。「いつでも最初の一步」という言葉が過去の特別例会のときにありまして、いい言葉だなと思いました。一つひとつのステップをグループも本人も確認し、喜びにしていく。ステップは本人からでも、家族からでも始まる。家族だけが始めるステップは、まず家族会に参加すること。「ひきこもりの問題は、うちの子もだけではなく若者全体が抱えている苦しさの一部だと思った」というステップを共有し、互いに喜びあうことから始めることが最初の一步かなと思います。

「親の会」と「家族会」の違いについて説明しますと、親の会は子どもが主役、親は脇役です。家族会というのは親も対等で、「当事者としての家族」として互いに何ができるか、家の中で互いにできないと決めつけるのではなく、たとえば夫婦間でも「家事ができない夫」と決めつけるのではなく「選択肢を用意していますか？」ということです。確認しあって、もっと家族同士が大人になっていく。「子どものためと思って家族会に参加したんですけど、結果的には夫のしつけを毎日考えています」という方もいらっしゃるくらい、ステップを誰からでも始められるということがヒントになるし、励まされるなと思いました。

以上、ひきこもり支援一般から見て、ファーストステップ・ジョブグループについて「こんなアイデアがあるんだ」と驚いたことをお話させていただきました。どうもありがとうございました。

司会：ありがとうございました。